

臨床実習における学生の満足度因子について

STUDENT SATISFACTION FACTOR IN CLINICAL TRAINING

小関 友記¹⁾ ・ 大友 篤¹⁾ ・ 加藤 勝行¹⁾

村上 賢治¹⁾ ・ 片田 昌子¹⁾ ・ 三浦 雅史¹⁾

Tomonori KOSEKI ・ Athushi OOTOMO ・ Kathuyuki KATO

Kenji MURAKAMI ・ Syouko KATADA ・ Athushi MIURA

キーワード：臨床実習、アンケート調査、学生満足度

Key words : clinical clerkship, Questionnaire survey, student satisfaction

要 旨

- 〔目的〕 満足度は学習の動機付けや職業意識に大きく影響する。各臨床実習における満足度はどのような因子に影響を受けているのかを分析する。
- 〔方法〕 本学の各長期臨床実習を修了した学生に臨床実習アンケートを行った。満足度と他の質問項目の相関係数を求め、高い相関の項目を独立変数、満足度を従属変数とした重回帰分析を行った。
- 〔結果〕 臨床実習Ⅱでは実習の難易度、指導者の工夫、関心の高まりが満足度へ影響を与えていた。臨床実習Ⅲでは指導時の適切性、実習への積極性が影響を与えていた。臨床実習Ⅳでは実習施設の雰囲気、指導時の適切性、自宅学習の集中度が影響を与えていた。
- 〔考察〕 臨床実習Ⅱは初めての長期実習により受動的姿勢となるため、難易度調整や指導工夫による理解、そこから得られる関心の高まりが満足度に影響していると考えられる。ⅢやⅣとなるに従い、学生の積極性や自主学習の影響が生まれてくる。
- 〔結論〕 臨床実習の各段階において、学生の心理的背景を考慮した関わりが必要である。

Abstract

- [Purpose] Satisfaction degree greatly affects learning motivation and occupational awareness. We analyze what factors affect the level of satisfaction in each clinical training.
- [Method] We conducted a clinical training questionnaire survey to students who completed each

1) 仙台青葉学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
受理日：2018年7月31日

long-term clinical training at our university. We calculated the correlation coefficient between the satisfaction level and the other question items, and performed multiple regression analysis with the high correlation item as an independent variable and the satisfaction degree as a dependent variable.

[Results] In clinical training II, a difficulty level of clinical training, ingenuity of supervisor, an increase in interest had an influence on satisfaction. In clinical training III, Appropriateness of guidance and proactiveness toward clinical training had an influence. In clinical training IV, the atmosphere of the training facility, Appropriateness of guidance and the degree of concentration of home study had an influence.

[Discussion] Since Clinical Practicum II induces a passive attitude through the long-term practical training for the first time, it is thought that the level of satisfaction is influenced by the understanding by difficulty level adjustment and Teaching devises and the increase in interest obtained from it. As the transition to III and IV, students' proactiveness and autonomous learning become influential.

[Conclusion] At each stage of clinical training, it is necessary to take account of the psychological background of students.

1. はじめに

本邦の理学療法教育における臨床実習においては、指導内容の整備や標準化が不十分といわれており、実際に国会答弁の対象となる¹⁾など、その社会的問題が示唆されている。その背景には、高度に専門化されている医療施設において求められる知識や技術、コミュニケーション能力に対する学習準備の難度や、それを実行する学生の学習スキルや社会的経験に対する適切な教育方法の困難性が挙げられる。これらの問題を解決するためには、臨床実習の構造的問題解決と同時に、実習を行う学生自身に、高い職業意識を育成することができる指導体制が必要である。

学生の臨床実習に対する満足度は、今後の学習への動機づけや職業意識に大きく影響する因子であるといわれている²⁾。しかし、現在の実習においては指導者や実習施設によって実習内容が大きく異なり、実習先での満足度には大きな差があるともいわれている^{3) 4)}。

学業に対する満足度に関して、その影響や背景となる因子について報告^{5) 6) 7)}があり、理学療法養成における実習においても報告は得られてい

る^{8) 9)}。しかし、その報告の多くは横断的に行われたものであり、それぞれの臨床実習における満足度に影響する因子が経時的にどのような変化を示すのかを検討した研究はみられない。

本学の長期臨床実習は通常、1つの実習期間が5週間～7週間にわたり、かつ3回と、長期にわたって行われる。そのため、それぞれの臨床実習の満足度に関しては学生のカリキュラム進行に伴う職業意識や意欲、能力の変化、様々な環境的因子、心理的因子に影響され、経時的に変化することが予想される。それぞれの臨床実習で、学生の能力や状況を踏まえ適切な指導体制を組むためには、どのようなことが学生の満足度に影響しているのかをそれぞれの実習において理解し指導に活かしていく必要があると考えられる。

そこで今回は、本学における実習生の臨床実習に対する満足度がどのような要因から影響を受けているか、本学において過去より用いられていた実習アンケートをもとに、実習に関して各教員の経験上、把握したい項目ならびに問題に上がりやすい事象を確認するための項目を列挙および検討・修正して作成し、その影響を与える要因はそれぞれの実習においてどのように変化をしているのか

を探るため、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳの実習終了後に実施した臨床実習アンケートの結果をそれぞれ分析し比較した。予備調査等を実施して項目の抽出については、有識者（博士取得者）3名からの助言をもとに作成した。

2. 対象および方法

本学理学療法学専攻において、平成28年度臨床実習Ⅱ（3年課程2年生の1月～2月に実施）及び平成29年度臨床実習Ⅲ（3年課程3年生の5月～7月に実施）、臨床実習Ⅳ（3年課程3年生の8月～10月に実施）をそれぞれ修了し、この研究に同意を得た学生に対して質問紙法にて行った。臨床実習Ⅱに関して実習を行った学生87名のうち、質問紙の回答を得られたのは85名（男子50名、女子35名）、臨床実習Ⅲに関して実習を行った学生80名のうち、質問紙の回答を得られたのは69名（男子39名、女子30名）、臨床実習Ⅳに関して実習

を行った学生85名のうち、質問紙の回答を得られたのは59名（男子32名、女子27名）であった。

回答数が減少している原因としてはアンケートの提出が行われなかった者や回答に不備が見られ研究調査のデータとして不十分なものが臨床実習Ⅱでは2件、臨床実習Ⅲでは6件、臨床実習Ⅳでは20件見られた。また、実習中断者や途中退学や休学に至った者に関しても精神的配慮を行い、本研究の対象とはしなかった。

研究協力者には、ヘルシンキ宣言に沿った研究としての意義について計画書と同意書の確認を得て、かつ本研究の説明に理解を得られた学生とした。実際にはアンケートを行う際に研究の主旨に関して説明を行い、アンケートの配布を行い、後日、アンケート回収ボックスへの提出を持って研究に同意したものとした。学生の氏名や学籍番号などの個人情報は暗号化を行い、データ分析の過程で個人が特定されないように配慮した。本研究

表1 アンケート内容

番号	質問項目	質問項目省略	自由記述
1	今回の臨床実習の朝の開始時間・夕刻の終了時間は適切と感じましたか。	一日の実習時間	○
2	今回の臨床実習のレベル（難易度）は、あなたにとって適切でしたか。	実習の難易度	
3	これまで短大で学習した内容に比べて、今回の臨床実習はどのように感じましたか。	学習内容との関連性	
4	臨床実習の経験は、今後に役立つと思いますか。	将来の有用性	○
5	臨床実習指導者の指導に、熱意は感じられましたか。	指導者の熱意	○
6	臨床実習の指導では、理解のための工夫（見学、模倣、体験、模範演技、図示など）は、行われていましたか。	指導者の工夫	
7	指導者の指導やフィードバックにおける対応や時間、言動は適切でしたか。	指導時の適切性	○
8	臨床実習によって、知識の習得や関心が深まりましたか。	関心の高まり	
9	今回の臨床実習に積極的に参加できましたか。	実習への積極性	○
10	今回の臨床実習に対して、十分な準備ができましたか。	実習前の準備	○
11	臨床実習における1日の平均睡眠時間はどのくらいでしたか。	平均睡眠時間	
12	臨床実習における1日の平均自宅学習時間はどのくらいでしたか。	平均学習時間	○
13	自宅学習は集中して行えましたか。	自宅学習の集中度	
14	学校の授業や特別授業で行った臨床実習前準備は適切でしたか。	オリエンテーションの適切性	○
15	学校における臨床実習後セミナーは適切でしたか。	セミナーの適切性	○
16	臨床実習中の学校の対応は適切でしたか。	実習中の学校対応	
17	臨床実習施設の雰囲気はいかがでしたか。	実習施設の雰囲気	○
18	今回の臨床実習に対する満足度はどのくらいですか。	実習への満足度	

によって個人に対して不利益が生じる状況は発生しないことを説明した。また、本研究に対して学生から中止の要望が出た場合には、ただちに収集したデータから削除することを説明した。倫理的配慮は、有識者からの承認を得て実施した。

本研究で用いた長期臨床実習用アンケートの項目を表1に示す。アンケートの項目は臨床実習の状況として把握したい項目や、実習中に問題として挙げられやすい項目を列挙し、重複がないように検討した。また、アンケート内容の文言についても精査することで、学生に誤解やバイアスを与えない表現となるよう配慮した。また、一部の質問に関してはより詳細な情報を得るため、自由記述の項目を設定しており、特に満足度に対して統計的に有意差が見られ、相関係数が高かった質問項目に関しては、その質問における自由記述内容を「学生に対して優しく接しやすい」、「教育力が高い」のカテゴリーに大別分類し、統計的結果と比較する方法を採用した。

今後の文中では質問項目の省略を用いる。それぞれの項目においては Likert 型 5 段階評価（①適切だった－②ほぼ適切だった－③どちらともいえない－④あまり適切ではない－⑤全く適切ではない、など①は良好な回答、⑤は不良な回答で設定した）で回答を求めた。

各臨床実習における、臨床実習に対する満足度に影響する要因について解析する方法として、満足度とそれぞれの質問項目の関連を分析するため、質問項目⑱の「実習への満足度」と各質問項目との Spearman の相関係数を算出した。そして相関が強い項目（相関係数0.4以上）を独立変数、実習への満足度を従属変数とした重回帰分析を各臨床実習のアンケート結果において行った。重回帰分析は有意水準5%以下であることを変数投入の打ち切り基準としたステップワイズ法を実施した。それぞれの統計処理には SPSS Statistics ver. 21.0を使用した。

3. 結果

臨床実習Ⅱにおけるアンケートの結果について

述べる。Spearman の分析において、臨床実習Ⅱにおいて臨床実習満足度と相関が見られた質問項目を表2に示す。

臨床実習Ⅱにおいて特に満足度と相関の高い（相関係数0.400以上）項目は②実習の難易度（.527**）⑤指導者の熱意（.442**）⑥指導者の工夫（.570**）⑦指導時の適切性（.415**）⑧関心の高まり（.448**）⑰実習施設の雰囲気（.484**）があげられた。これらの相関係数の高い項目を独立変数、臨床実習満足度を従属変数とした有意水準5%未満であることを変数投入の打ち切り基準としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した結果、②実習の難易度⑥指導者の工夫⑧関心の高まりが因子として見られた（図1）。⑤指導者の熱意⑦指導時の適切性⑰実習施設の雰囲気については回帰式に投入したとしても有意水準が5%以上であり、実習への満足度への影響を有意に説明することができなかった。

次に臨床実習Ⅲにおけるアンケートの結果について述べる。Spearman の分析において、臨床実習Ⅲにおいて臨床実習満足度と相関が見られた質問項目を表3に示す。

臨床実習Ⅲにおいて特に満足度と相関の高い（相関係数0.400以上）項目は②実習の難易度（.482**）④将来の有用性（.438**）⑦指導時の適切性（.617**）⑧関心の高まり（.557**）⑨実習への積極性（.551**）⑰実習施設の雰囲気（.499**）があげられた。臨床実習Ⅱと同様の重回帰分析を実施した結果、⑦指導時の適切性⑨実習への積極性が因子として見られた（図2）。②実習の難易度④将来の有用性⑧関心の高まり⑰実習施設の雰囲気については回帰式に投入したとしても有意水準が5%以上であり、実習への満足度への影響を有意に説明することができなかった。

次に臨床実習Ⅳにおけるアンケートの結果について述べる。Spearman の分析において、臨床実習Ⅳにおいて臨床実習満足度と相関が見られた質問項目を表4に示す。

臨床実習Ⅳにおいて特に満足度と相関の高い（相関係数0.400以上）項目は⑦指導時の適切性

(.515**) ⑧関心の高まり (.456**) ⑨自宅学習の集中度 (.410**) ⑩実習施設の雰囲気 (.514**) があげられた。これまでと同様に重回帰分析を実施した結果、⑩実習施設の雰囲気⑦指導者の適切性⑬自宅学習の集中度が因子として見られた(図3)。⑧関心の高まりについては回帰式に投入したとしても有意水準が5%以上であり、実習への満足度への影響を有意に説明することができなかった。

4. 考察

はじめに臨床実習Ⅱアンケートの結果に対する考察を述べる。初めての長期臨床実習に対する学生の心理的状況を察するに、社会的経験の少なさにより想像を超える対応の連続を迫られる。患者を担当するという状況以前に、まずは実習施設業務に迷惑をかけないように心がけ行動するのが精一杯であると考えられる。つまり、さまざまな状

表2 臨床実習Ⅱにおける満足度とその他の質問項目における相関

番号	質問項目省略	満足度との相関係数	有意差
1	一日の実習時間	.170	
2	実習の難易度	.527	**
3	学習内容との関連性	.118	
4	将来の有用性	.347	**
5	指導者の熱意	.442	**
6	指導者の工夫	.570	**
7	指導時の適切性	.415	**
8	関心の高まり	.448	**
9	実習への積極性	.395	**
10	実習前の準備	.171	
11	平均睡眠時間	.257	*
12	平均学習時間	.110	
13	自宅学習の集中度	.296	**
14	オリエンテーションの適切性	.120	
15	セミナーの適切性	.135	
16	実習中の学校対応	.244	*
17	実習施設の雰囲気	.484	**

** p<0.01 * p<0.05

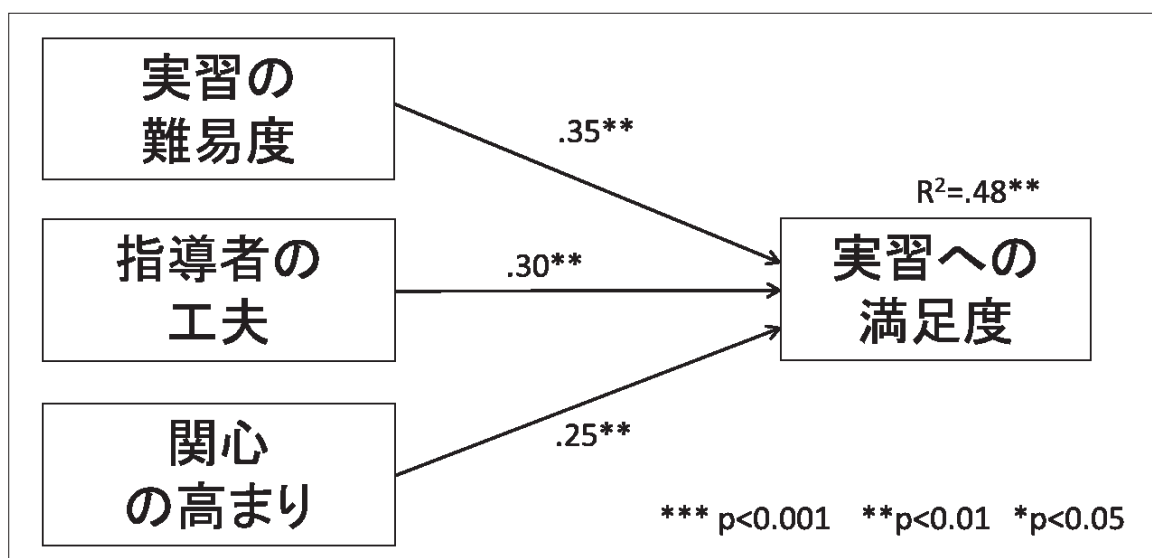


図1 臨床実習Ⅱにおける実習への満足度に対する重回帰分析

況に対して受動的姿勢とならざるを得ない。

まだ学習が十分に進んでいない学生に、新奇性の高い環境で試行錯誤が必要な状況を強いることで、失敗や指導者からの注意・叱責による不安や緊張などの嫌悪刺激が回避行動を生みやすい状況を作る¹⁰⁾ことが言われている。

そのような心理的姿勢に対して、やみくもに試行錯誤や積極性、自主性を求める関わりよりも、むしろその受動的姿勢に基づいて、様々な理解や

経験を促す関わりを用意することや、行動を明確化し学生が出来ることから実施し賞賛を与え、様々な症例を横断的に経験することで、十分に自信をつけてから、より広い視野で知識や技術を見直す余裕が学生に生まれているかどうかを確認しながら指導を図る指導の姿勢や体制が必要であると考えられる。

また、この時点での学生は、未だ自分の将来について十分な展望を持つことができていない者も

表3 臨床実習Ⅲにおける満足度とその他の質問項目における相関

番号	質問項目省略	満足度との相関係数	有意差
1	一日の実習時間	.289	*
2	実習の難易度	.482	*
3	学習内容との関連性	-.072	
4	将来の有用性	.438	**
5	指導者の熱意	.344	**
6	指導者の工夫	.372	**
7	指導時の適切性	.617	**
8	関心の高まり	.557	**
9	実習への積極性	.551	**
10	実習前の準備	.387	*
11	平均睡眠時間	.246	*
12	平均学習時間	-.142	
13	自宅学習の集中度	.175	
14	オリエンテーションの適切性	.160	
15	セミナーの適切性	.222	
16	実習中の学校対応	.298	*
17	実習施設の雰囲気	.499	**

** p<0.01 * p<0.05

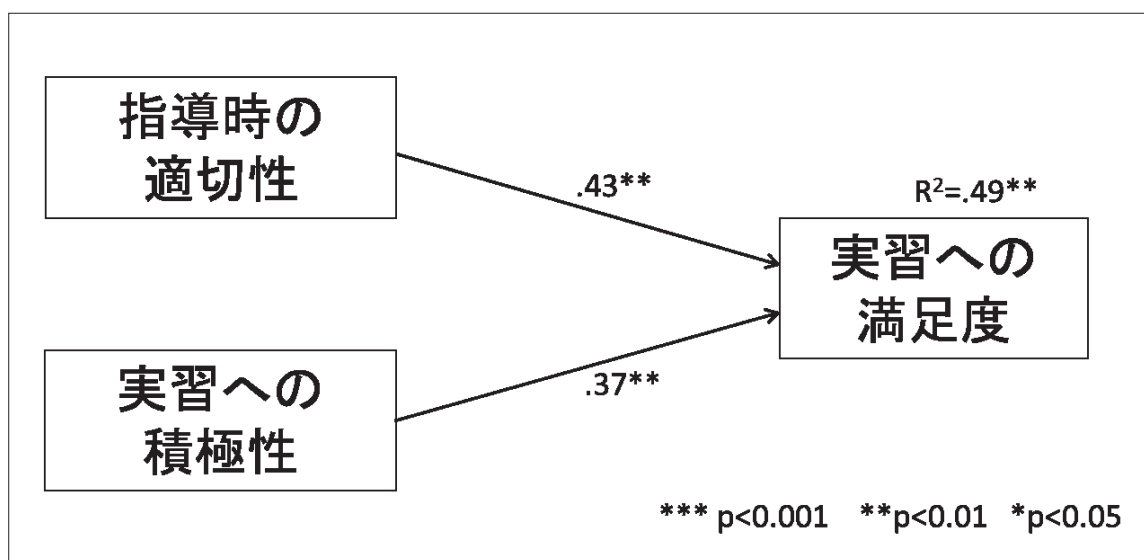


図2 臨床実習Ⅲにおける実習への満足度に対する重回帰分析

多い。未来への展望や希望、目標志向、過去受容という時間的展望は、学習満足度と相関する^{11) 12)}といわれている。

様々な実習体験を通じて、理学療法が有用な未来の目標として確立し、これまで学んだ過去の学習が基礎となり、現在の臨床でより発展の必要性を感じられるという過去と現在、未来の時間的展望が得られる実感も臨床実習満足度に大きく関わると考えられる。

そのため、自分の力量に適切に合致した難易度調整を指導者や実習施設が行っているか。わからないことについて理解を促すような指導をしているか。これから自分の一生の仕事として向き合うに相応しい知見の広がりをもたらしているかという要素が、この時期の臨床実習生の満足度に強く影響していたと考えられる。

次に臨床実習Ⅲアンケートの結果に対する考察を述べる。二回目の長期実習であり臨床実習及び

表 4 臨床実習Ⅳにおける満足度とその他の質問項目における相関

番号	質問項目省略	満足度との相関係数	有意差
1	一日の実習時間	.349	**
2	実習の難易度	.381	**
3	学習内容との関連性	-.010	
4	将来の有用性	.193	
5	指導者の熱意	.371	**
6	指導者の工夫	.358	**
7	指導時の適切性	.515	**
8	関心の高まり	.456	**
9	実習への積極性	.310	*
10	実習前の準備	.206	
11	平均睡眠時間	.199	
12	平均学習時間	-.022	
13	自宅学習の集中度	.410	**
14	オリエンテーションの適切性	.131	
15	セミナーの適切性	.140	
16	実習中の学校対応	.230	
17	実習施設の雰囲気	.514	**

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

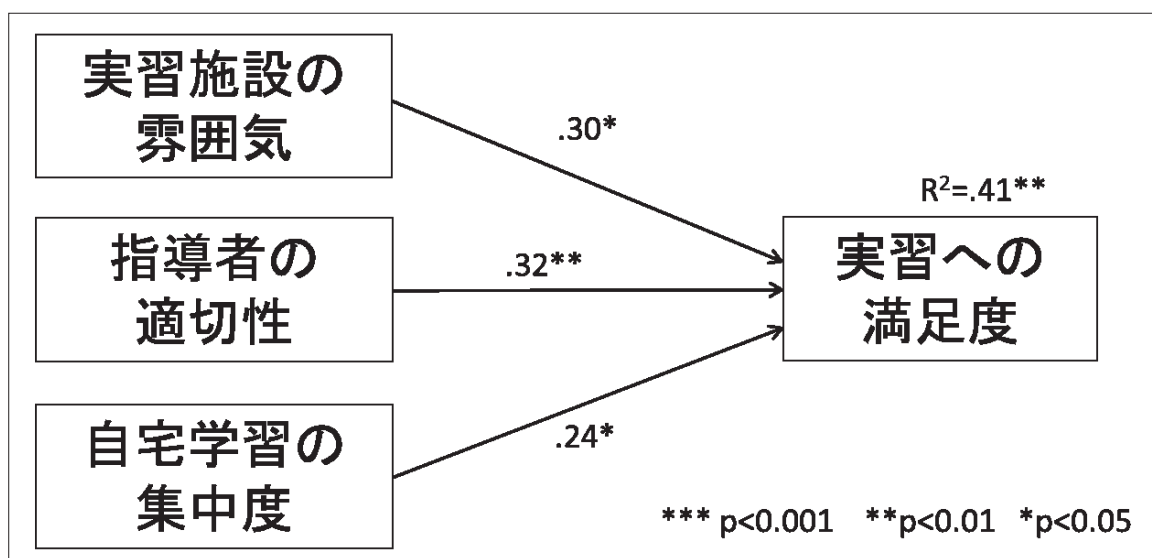


図 3 臨床実習Ⅳにおける実習への満足度に対する重回帰分析

病院施設での働き方についてある程度の理解が生まれ、かつ最終学年となり就職活動も意識され始めていることが、臨床実習に対して積極的に参加できているかどうかという因子の重要性の増加に影響していると考えられる。

原田は大学最終学年の実習達成感には「患者との関わり」の中で「困難状況を乗り越える」ための「自分自身の努力」「教員や実習指導者の支持的態度や指導・助言」が必要¹³⁾としている。最終学年となり、自分の将来という現実と直面する時期でもあり、可能ならば自分から積極的に動いて反応を確かめたいという心理が働いていると考えられる。また、どのような実習施設、どのような難易度の実習であろうと適切に課題を解決していく必要があるということに気づき始める時期でもあり、患者から得られるどのような情報でも意味のある解釈を持ち、知識、経験として蓄えていくことが必要と自覚する時期でもある。

そこで自己の行動や思考が現実的側面に価値のあるものなのかどうか、客観的視点からの適切なアドバイスや関わり的重要性に気づく時期であると考えられる。また、積極的動機がある学生の満足度は「教授努力」によって高まり、積極的動機のない学生においては、適切な「コミュニケーション」は「学生の努力」及び「理解度」を向上させ、結果として満足度へ影響を与える^{14) 15)}といわれている。また、「肯定的・支持的指導」と「積極的・成長促進因子」の2因子が効果的に実施されることで、学生は萎縮することなく、自身の問題と向き合い前向きに改善していくと言われている¹⁶⁾。本研究においても重回帰分析の結果、臨床実習Ⅲ・Ⅳにおいて、指導時の適切性が満足度の因子として検出されている。

このことから適切な時間配分のもと実習生対応を行い、かつ肯定的、支持的なコミュニケーションによって必要以上に心理的負荷を与えず、様々な臨床問題に対する適切なアドバイスを与える指導時の関わりが臨床実習Ⅲでは必要とされており、そのため臨床実習指導者の指導に対する適切性が、実習満足度に影響していると考えられる。

次に臨床実習Ⅳアンケートの結果及び臨床実習Ⅱ～Ⅳのアンケート全体に対する考察を述べる。臨床実習Ⅳは臨床体験の最終段階としての実習であり、ここでは一人の理学療法士として自立する心理的姿勢が重視される。ここで重要なのは、全ての理学療法業務を一人で行おうとすることではなく、目の前の患者について、様々な知見を得て自己や周囲の解釈を踏まえ、様々な職種と協調しながら適切な関わりを果たそうとする姿勢である。この時点では理学療法にかかわる臨床思考過程はある程度身についており、それを実現するための方法も理解ができている。

そこで必要となるのが、それらの過程を十分に果たすための準備過程となる自主学習であり、理学療法士としての専門性を高めていくために生涯学習の必要性に気づけているかどうか重要と思われる。そのため、自宅学習を集中して行えたかどうか満足度に影響を与えているのだと考えられる。また一方で、その行おうとしている、もしくは行った学習内容が適切なのかどうか、どのような意味を持つのかという、客観的視点としての周囲からの適切なフィードバックの重要性として、指導者の適切性も満足度に影響を与えていると考えられる。

また臨床実習Ⅳにおいては実習施設の雰囲気も大きな影響を満足度に及ぼしている。また実習施設の雰囲気はあらゆる実習段階において高い相関係数を持っており、重回帰分析には現れていないものの、非常に大きな影響を満足度に及ぼす因子のようである。どのような雰囲気が学生は好ましいと感じられているのかを⑩実習施設の雰囲気において「とても良かった」「良かった」の選択肢を選んだ者の自由記述内容について分類を行った。

分類の手法は臨床実習Ⅱおよび臨床実習Ⅳにおける該当項目の自由記述内容から「優しい」「アットホーム」「スタッフ間の仲がよい」「誰にでも質問をしやすい」など、学生に対して優しく接しやすい雰囲気を好ましいとする内容のキーワードが入っている回答を「学生に対して優しく接しやすい」カテゴリー、「様々な分野を見学・体験できる」

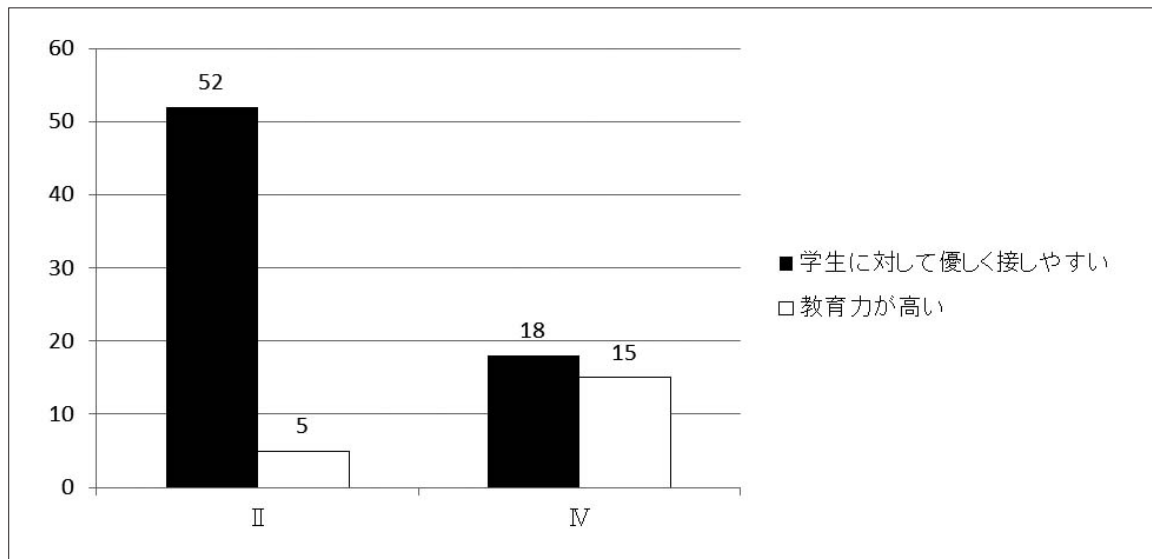


図4 実習施設の雰囲気における自由記述のまとめ

「理学療法士間や多職種間でのディスカッションがしっかりしている」「勉強会が多い」「全員が技術向上に努めている」「新人教育がしっかりしている」など、学習・教育の機会がある雰囲気を好ましいとする内容のキーワードが入っている回答を「教育力が高い」のカテゴリーに分け、検討しながら分類を行った。まとめた結果を図4に示す。

臨床実習Ⅱでは学生に対して「優しく接しやすい」雰囲気を好ましいとする回答が52件と多く、実習施設において「教育力が高い」雰囲気を好ましいとする回答は5件であった。臨床実習Ⅱにおいてはスタッフ間のコミュニケーションのよさ、心理的に安定した環境、学生に対しても優しく接してくれる対応が好ましいと感じられていることが推察され、これは重回帰分析で得られた満足度への因子と同様と思われる。

一方で臨床実習Ⅳでは臨床実習Ⅱでみられた「優しく接しやすい」雰囲気を好ましいとする回答は18件であり、一方「教育力が高い」雰囲気を好ましいとする記述が15件と、その割合が増えており、より教育力を高める学習環境を必要とする臨床実習Ⅳの重回帰分析の結果を支持するものと考えられる。

そのような分析を踏まえると、学生が好ましいと感じている実習施設の雰囲気には各臨床実習に応じて違いがあると考えられ、臨床実習Ⅱでは学

生の受動的な姿勢を許容して様々なことを教授するような雰囲気が好ましいと感じられており、臨床実習Ⅳでは一人の理学療法士としての責任感や患者に対する責任感が芽生えたことにより、その実習施設の教育力によって学習を推進してくれる雰囲気が好ましい雰囲気として学生に認識される傾向があると思われる。

専門的な知識技術、高度な人的サービスが要求される臨床場面や、高度に作業が構造化されている医療施設において、社会的経験が未熟な学生に積極的行動を求めるのは、その能力やカリキュラム上からも過剰な課題となる可能性が高い。今回の結果からも、そのような積極的参加が実習への満足度に影響する因子として見られてくるのは臨床実習Ⅲである。臨床実習Ⅱにおいては、いまだ自身の能力や将来について自信が持てず展望を開くことが出来ない実習生の状況を、受容・共感できる指導者の対応や指導方法、実習施設の雰囲気の中で、自分のこれからの仕事としての現実感が徐々に実感でき、より理学療法への興味や関心が増すような関わりが、今後継続する実習や臨床業務の関わりの基礎となっていくと考えられる。

これまでは相関係数の高い因子や重回帰分析によって打ち切られなかった因子について述べてきたが、ここからはそれ以外の因子について考察する。本研究において、それぞれの重回帰分析にお

ける決定係数 (R^2) は0.4~0.5の値を取っており、残差変動の影響があることを示している。つまり、本研究の結果は全ての学生にあてはまるものではなく、あくまで大まかな傾向であり、実習満足度の背景因子には学生の個別性が存在し、その学生がその実習においてどのようなことを求め、どこから満足感を得るということを把握するには、個別対応が必要となることを示唆している。実際の臨床実習指導においては、学生全体の傾向を踏まえつつも、一人ひとりの学生の個別性にも配慮した関わりが必要となると考えられる。

また今回の結果において、学校で行った学習内容やオリエンテーション内容に関して、満足度に影響する相関は得られていない。これは学生の実習に現実的に実用性の高い授業内容やオリエンテーションを提供できていない可能性が存在する。臨床実習は多様な実習状況や患者状況に対して、現実的応用的に対応する必要性の連続である。知識を確実に学習することは当然であるが、それ以上にそれらの知識の意味を理解し、複雑な患者情報に依じて適切に応用する力が求められる。そのためには、学内でも模擬的に患者情報に応じた臨床思考過程の展開を図るケーススタディと、より個別的なフィードバックが行える学習体制やカリキュラム設定が必要であると考えられる。

また、今回の研究において、精神的影響により実習が困難となり中断となった学生については調査することは出来ていない。ただ、そのような学生は本研究で述べられてきたような実習対応が出来ていなかったか、もしくは各実習で生まれた臨床実習への高い満足度を得るための必要な因子が十分に提供できていなかった可能性がある。実習生の精神的健康度についても報告が得られており^{17) 18)} その対応の必要性が語られている。今回得られた研究を元に、各臨床実習で求められる実習施設における対応と、実習生に求められる課題を明確に設定し、実習生の心理状態や学習状況を踏まえた実習指導体制を構築することで、臨床実習の不本意な中断を減少させるひとつの方略となるのではないかと考えられる。

5. 結論

満足度を軸とした実習臨床実習の各段階において、学生の心理的背景を考慮した関わりがそれぞれ必要である。特に臨床実習Ⅱでは難易度調整と指導工夫により、未来への展望が開けるような関心の高まりを向上させ、臨床実習ⅢやⅣでは、徐々に現れてくる学生の積極性や自主性を育むような適切な指導と環境を準備することが必要である。

6. 謝辞

本論文の作成にあたり、日頃より理学療法について共に学び、今回の研究についてその趣旨を理解し協力して頂いた研究協力者の理学療法養成校の学生及び教職員の皆様方に心から感謝いたします。

また本研究にあたって研究助成金受給は受けておりません。

7. 引用文献

- 1) 衆議院ホームページ理学療法士・作業療法士の臨床実習に関する質問主意書。
http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a190180.htm
- 2) 片山由美, 奥津文子: 隣地実習目標達成度評価と実習満足度のとの関連—学生の満足度を組み入れた臨地実習目標達成度評価の一考察—。京都大学医療技術短期大学紀要 (2003), 23: 33-42
- 3) 山口 泉, 和田三幸, 藤井菜穂子, 谷 弘明: 臨床実習の満足度に影響する要因について: 実習指導者との関わりに着目して。日本理学療法学会大会, 2013
- 4) 見田尚子, 佐藤成登志, 村松健二: 臨床実習における学生の QOL と実習満足度の関係。日本理学療法学会大会, 2011
- 5) 山城奈緒里, 塚本加奈子, 羽賀亜矢子, 清水篤実: 臨床実習を充実させる要件 —学生の視点から—。医学教育 2006, 37: 35-38

- 6) 久保晃, 堀本ゆかり, 韓憲受, 野村高弘, 貞清香織: 理学療法学部生の学習と生活面の満足度の縦断的調査—2 年末から卒業まで—. 理学療法科学 2017,32:709-712
- 7) 加藤英一: 授業の満足度と成績の関係—北里大学一般教育部の授業(社会学)におけるアンケート調査を通じて—. 北里大学一般教育紀要15 (2010) 159-177
- 8) 和田三幸, 大武 聖, 渡邊観世子, 黒澤和生: 臨床実習における実習満足度因子の検討と方策 —学生に対するアンケート調査結果から—. 第52回日本理学療法学会大会 抄録集 2017, Vol.44 Suppl. No.2
- 9) 村藤卓秀, 斎藤圭介, 原田和宏, 日高正巳: 臨床実習における指導類型と学生の満足度・自己効力感との関連.第47回日本理学療法学会大会 抄録集 2012, Vol.39 Suppl. No.2
- 10) 中川法一編: セラピスト教育のためのクリニカルクラークシップのすすめ(第2版), 三輪書店, 東京, 2013, pp121-125.
- 11) 五十嵐素子, 森山雅子, 杉本英晴, 谷伊織: 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究(29)—学校満足度と時間的展望の関連—. 教育心理学第56回総会.2014.328
- 12) 奥山雄一郎: 大学生の時間的展望の構造に関する研究—過去・現在・未来の満足度の相対的關係に着目して—. 共愛学園前橋国際大学論集 8, 13-22
- 13) 原田秀子: 臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析(第3報)—4 年次学生に対しての縦断調査を通して—. 山口県立大学看護学部紀要, 2006, 10, 29-37
- 14) 星野敦子, 牟田博光: 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係. 日本教育工学会論文誌 2005, 29 (4) 463-473
- 15) Atsuko Hoshino, Shun-ichi Kitahara, Kouji Singyouchi, Kazuhisa Adachi, Masayasu Watai: Analysis of Influential Factors on Computer Literacy Course Evaluation, Society for Information Technology and Teacher Education 16th International Conference Proceedings. 872-877
- 16) 関裕也, 松本直人, 隆島研吾, 関貴子: 学生が満足する実習指導因子の検討. 理学療法学, 2006, 33 (6) 334-337
- 17) 仙波浩幸, 清水和彦: 理学療法専攻学生の精神的健康度—精神的健康度12項目版と Zung 自己評価式抑うつ尺度日本語版を使用した評価—. 豊橋創造大学紀要, 2011, 15, 99-112.
- 18) 立石恵子, 立石修康: 作業療法学科臨床実習における学生の抑うつとストレスコーピング. 九州保健福祉大学研究紀要, 2006, 7, 173-176.